

人気小説家・青柳碧人先生による講演会を開催しました 令和8年3月12日

本校では、小説家の青柳碧人(あおやぎ あいと)先生をお招きし、講演会を開催しました。

青柳先生は、2009年に発表したデビュー作『浜村渚の計算ノート』で注目を集めて以来、数多くの作品を発表してきた人気小説家です。中でも、童話をモチーフにしたミステリー「赤ずきんちゃん」シリーズ(『赤ずきん、旅の途中で死体と出会う。』など)は、幅広い世代から高い支持を集めています。

今回の講演では、瑞陵高校の卒業生である江戸川乱歩と杉原千畝を題材に描いた小説『乱歩と千畝～RAMPOとSEMPO～』(新潮社・直木賞候補作)を軸に、物語づくりの裏側や作家としての生き方についてお話いただきました。

「好き」と「好奇心」が物語の原点に



青柳先生は、東京学芸大学附属高校から早稲田大学へと進学し、中学・高校の教員免許を取得。大学時代にはクイズ研究会に所属し、仲間と交流しながら問題を作ったり解いたりする中で、幅広い知識や視点を身につけていったそうです。「自分から動いて、人と関わるのが好きだった」という

言葉どおり、そうした経験の積み重ねが、作品に登場する個性豊かな人物像につながっていることが伝わってきました。

生徒の声

中学生の頃まではよく本を読んでいましたが、高校に入って忙しくなり、あまり読まなくなっていました。でも青柳先生のお話を聞いて、「また本を読みたい」と自然に思えたのが嬉しかったです。小説家という仕事の楽しさと大変さを、リアルに知ることができました。

『乱歩と千畝』誕生の舞台裏

講演では、『乱歩と千畝』が生まれた経緯についても詳しく語っていただきました。編集者から「江戸川乱歩について解説してほしい」と依頼されたことをきっかけに調べ始め、その過程で杉原千畝という人物に出会ったことが、物語の出発点だったそうです。さらに、二人が同じ瑞陵高校の卒業



生であると知り、「これは一つの物語にしたい」と強く感じたといいます。当初は謎解きミステリーとして構想されていましたが、次第に歴史小説へと形を変え、青柳先生にとっても新たな挑戦となった作品だそうです。

生徒の声

人と違う視点を持ったときに、「間違っているかもしれない」と引っ張ってしまわず、大事にしているのだと感じました。



「やってみなければ、わからない」— —心に残るメッセージ

講演の中で、青柳先生は人生について、次の言葉を生徒たちに投げかけてくださいました。

やってみなければ、わからない
失敗は、できるだけ早いほうがいい

行き詰まったときには、「小説は自由だ」と自分に言い聞かせ、思い切って前に進むこともあるそうです。多くの作家の言葉に支えられながら、今も創作と向き合い続けている姿が、強く印象に残りました



生徒の声

作家として長い間、自分自身と向き合いながら仕事を続けていることが本当にすごいと思いました。
どのお話からも青柳先生の考え方やユーモアが伝わり、とても楽しい講演でした。

物語を書くこと、続けること

作品を書く前には、まず主人公とその周囲のキャラクターをしっかりと作り込むことを大切にしているという青柳先生。実在の人物やアニメのキャラクターを参考にすることもあるそうです。

また、趣味や創作を長く続けるコツとして、「ちょっとずつでいい。でも、止まらないこと」という言葉が、生徒たちの心に残りました。

生徒の声

この講演をきっかけに本に興味を持ち、図書室で借りた本を通学中に読むようになりました。読書って楽しいですね。

視点を変えることで、物語は広がる

同じテーマでも、視点を少し変えるだけでまったく別の物語になる——。創作に悩んでいた生徒にとって、青柳先生の言葉は大きなヒントとなりました。



生徒の声

自分で書いた小説が似た内容ばかりになることに悩んでいましたが、視点を変えることで新しい物語になると気づかせていただきました。

心に残る講演となりました

第一線で活躍する青柳碧人先生の言葉は、生徒一人ひとりにとって、読書や創作、そして自分自身の将来を考える大きなきっかけとなりました。

今後も本校では、生徒の学びを広げるこのような機会を大切にしていきたいと考えています。

